

教父研究雜感

大森 正 樹

四半世紀以上前、西も東もわからぬローマに着いてしばらく後、用あつて夜外出し、さて宿舎に帰ろうとしてバスに乗った。闇の濃いローマの街中を走るバスから降りるべき停留所を間違えないようにと思ひ（当時ローマのバスにはアナウンスも停留所の表示もなかつたし、それが当たり前であつた）、注意したがやはり間違つて降りてしまい、本来の停留所へは何百メートルか、さらに歩かなくてはならなかつた。乗り換えの場所に着き、ほつとはしたものの、自分のいる地点がわからなくなつたときのあの何とも言えない途方に暮れた、戸惑い感は今でもはつきりと覚えてゐる。ローマでの生活は何から何まで日本と違い、それに慣れるまでに一年くらいはかかつたが、途中、しばしば自分はどうして、何を目的にここまで来たのかと自問した。行き交う人びとを見ながら、ここでたとえ自分が果てても、それほど影響を回りに起こさないのであらうという思ひはどこか苦々しいものがありながら、わずかに無に帰す

る快感に震えるものでもあった。

そうだ、ここへ来たのは、日本ではまだ認知されているとは言えない、東方キリスト教の思想を学び取り、グレゴリオス・パラマスの研究を本格的に始めるためだった。ところが指導を期待していたS先生は、もう八十歳近く、その頃すでにリタイヤーし、第一線からは退いておられた。その上、厳正なイエズス会員として、西方神学の立場からパラマスの思想の問題点を指摘された。それに対し私が西方では必ずしもパラマスに反対の立場をとる人ばかりではなく、たとえばある研究者は好意的であると言うと、即座に「彼の考えは空想的である」と一蹴された。よく考えてみれば、このローマの「オリエンターレ」(東方教会研究院)はある意味反パラマス主義で固められていたから、その答えは当然の結果だった。

そういうわけで頼る人は容易に見出すことができなかつたので、可能な限りの文献を集めること(オリエンターレは東方教会に関して相当の文献を集めており、これはロシア人のS・ボルシヤコフも認めている。『ロシアの神秘家たち』古谷 功訳、一九八五年、四七六頁)にして、テキストを読み解いていっても、漠としたことしかわからず、真意はなかなかつかみ取れなかつた。ようやく異国の生活にも慣れ、それなりのイタリア人との接し方も会得したが、相変わず、肝心のパラマスは遠くにいた。私は当てどもなくさまよっているかのようだった。それは最初に書いた、目的地を見失ったあの戸惑い感とどこか似ていたのである。

翻って今日の日本の学的現状を眺めてみると、多くの若い人の教父、しかもラテン教父ではなく、ギ

リシア教父やビザンティン外の教父といった、あの当時では想像もされなかった分野への進出が際立っている。隔世の感がある。

これは世界が情報化し、かつてはなかなか手に入らなかった文献などを割合容易に手中に収めることができるようになったことが大いに与っていることだろうが、それ以上に極東の人間も様々な分野に目を注ぐようになり、われわれにとつて大きな障害となる言語習得も、研究者の才能と相まって順調になされるようになったからであろう。つまり日本においても幅広い関心をもつてキリスト教や西洋思想の根底的理解が進みつつあることを示している。これまで明治維新以来、富国強兵の線にそつて、特に技術面に特化して、欧米化することに躍起になっていた日本が、つまりその表面的西洋理解が考え直され、ようやくその根元に理解を及ぼそうとし、これまで等閑に付されていた領域に注目し始めたということをも意味するであろう。

それゆえこれからの教父研究には、たんにそれを祖述することで終わるのではなく、さらに深く踏み込んで、現代においても通用する、普遍的な教父の思想とは何であるかを解明していくという課題があるように思う。このためには、教父のテキストの綿密で厳格な読み込みは大前提であつて、それは揺るがしえない。このことなくして教父研究は成り立たない。そして現在より遙かな過去の遺産を可能なかぎり教父の意識にそつて、内在的に理解しなければならぬ。しかし問題は、教父の時代とこの二十一世紀との時間的隔たりである。教父の論述には時代の子としてのある種の制約があろう。特にキリスト教教義形成期

の教父の意識は現在時点でのわれわれのキリスト教理解と大きくずれることもありうる。だからこそかえって厳密な読みによって、教父のうちに潜む普遍的精神を問ひ直さなければならぬ。苔むした古い衣を剥いだ後に、どれだけ生の中核的精神をわれわれは見つけ出すことができるだろうか、そしてわれわれはそこからどれだけ現代に光明をもたらしことができるだろうか。その光明は、教父の人間存在探究の態度に今一度目を注ぐことによってのみもたらされることだろう。

ところで現代においては、教父研究の領域のみならずあらゆる面において、人間存在の根本的あり方に眼差しを向けることと人間にとつても大切なことは何かを損得ぬきで考えることによつてしか、先へは進みえないように思える。だから二〇一一年三月一日以来の混迷した日本の建て直しも同様であつて、小手先の復興ではなく、人間の生き方、価値観の問い直しというある意味で気の遠くなるような長期にわたる下積みの作業をも覚悟する必要があるのである。